

〈海軍都市〉 神戸と大日本帝国海軍の内実

——大岡昇平『酸素』が描き出したもの——

尾 添 陽 平

1

大岡昇平『酸素』は雑誌「文学界」に一九五二年一月より翌五三年七月まで連載され（五三年五月は休載）、一九五五年七月、新潮社より刊行された。しかし、『酸素』単行本刊行時の評価は決して芳しいものではなかった。例えば奥野健男は『酸素』を「通俗的な恋愛小説に過ぎない」⁽¹⁾と酷評している⁽²⁾。また『酸素』は、単行本の巻末に「第一部終」とあり、「第一部」のみが完結した“未完”の状態のまま刊行された作品でもあった⁽³⁾。大岡は単行本刊行後、幾度となく『酸素』「第二部」執筆の構想を語っているが⁽⁴⁾、結局「第二部」は書かれることなく、一九八八年十二月二十五日、大岡はこの世を去っている。

“未完”のまま放置されたという事情もあってか、『酸素』への「積極的評価はわずか」⁽⁵⁾な状態にあった。大岡自身は“未完”に終わったことや同時代評が芳しくなかったことがこたえていたのか、『酸素』について「作品は惨めな失敗に終わりました」⁽⁶⁾と記している。しかし大岡は、別の機会では「『酸素』は反「細雪」を書かんとする下心があった」⁽⁷⁾と、その執筆意図を明らかにした。そして、大岡の明記した「『酸素』は反「細雪」という『酸素』の

執筆意図は、それが公にされて以降、発表された『酸素』論に大きな影響を与えることとなる。

清水徹は、「『酸素』は反『細雪』」という『酸素』の執筆意図を「見落としてはならない」と指摘し、「『酸素』は反『細雪』」という構図を論の根幹においた。清水は、大岡が『酸素』を執筆する上で仮想敵とした谷崎潤一郎『細雪』（上巻）一九四六年六月、〔中巻〕四七年二月、〔下巻〕四八年十二月、中央公論社）について、『細雪』には「当時のいくつかの政治状況」——日中戦争から太平洋戦争へと雪崩れ込んでいく日本の政治状況——が「点景あるいは作中人物たちの話題」としてわずかに取り込まれている程度で、『細雪』にはきちんと《政治》が描かれていないと批判し、一方で「大岡は谷崎とちがつてけっして時代から眼をはなさない」と指摘、「じつはすでに基盤が崩壊しはじめている日本の市民社会を描き、危険の上に欺瞞的にあぐらをかいていたそのありようを告発するという批評的な姿勢が、明らかにこの『酸素』という社会小説をつらぬいている」と自らの『酸素』論を結論付けた。清水は『酸素』と『細雪』を比した上で、『酸素』には『細雪』が排除した《政治》が描き込まれたと「積極的評価」を下したのである⁽⁸⁾。

本稿は、『酸素』を『アンチ細雪』と捉えた上で論を展開した清水論に決して逆らうものではない。しかし『酸素』の『アンチ細雪』性は、清水の他、既に花崎育代⁽⁹⁾によっても検証されており、今さらそれを論じたところで、清水論や花崎論以上の成果は期待できないだろう。よって本稿は、大岡の明記した「『酸素』は反『細雪』」という『酸素』の執筆意図にはあまり引きずられずに、そもそも『酸素』という小説は一体何を描き出したのか、『酸素』の小説世界そのものを読み解いていきたい。

本稿は『酸素』の小説世界を解析するため、『酸素』の舞台となった神戸という都市が『酸素』の小説世界からどのようなイメージをして浮上してくるのか検証していく。『酸素』の描き出した神戸の都市イメージを解明することによって、『酸素』の小説世界そのものを明らかにしたいと思う。

六甲山から神戸の街全体が見渡せることなど、今さら言うまでもないことである。神戸とその周辺を舞台とする『酸素』にも、六甲山より神戸の街を俯瞰的に見渡した描写が存在している。では六甲山より俯瞰的に見渡された神戸の街全体は、『酸素』において、どのように描写されているのであろうか。

その先に住吉、岩屋、大石の河川がつくるデルタを海岸に突出した六甲山麓の沖積地が、学校や工場や住宅の屋根を、曇った空の下に抜げていた。

さらに遠く神戸、兵庫の突堤から、川口造船所の大船台が、建造中の航空母艦を板でかこっているのが見えたと。海岸線と平行に凹んだ曲線を持つ防波堤で、扇形に切り取られた「扇港」に、沢山の船が繫留されていた。

葺合の鉄工所の煙突が吐き出す煙が棚引いて、俯瞰景の一部を隠していた。汽車か電車が、沖積地を横に貫く三本の線路の上の、どれかを走っていた。

六甲山から見渡された神戸の街は、「沖積地」に「学校や工場や住宅の屋根」が広がる街として描き出されている。港には「沢山の船が繫留され」、「三本の線路」が神戸の街を貫いている。

ただこの個所で、河川には「住吉」「岩屋」「大石」といった固有名詞が与えられているが、それとは対照的に、麓を並べる「住宅」にはもちろん、眼下に広がる阪神工業地帯の「工場」にも、神戸のアカデミズムを支える「学校」にも、固有名詞が与えられることはない。「三本の線路」とは、阪神間を並行して走る鉄道路線、阪急、省線、阪神の鉄道をまとめて指している。しかし、「三本の線路」が「阪急」「省線」「阪神」と、それぞれに固有名詞を与えられて、それぞれに描写されることはない。「汽車か電車が、沖積地を横に貫く三本の線路の上の、どれかを走ってい

た」と阪急も省線も阪神も一くくりにされ、ここでは描写されている。

ただこの個所を読み解くと、河川以外で唯一、固有名詞を与えられているものが存在していることに気付く。では、河川以外で唯一、固有名詞を与えられたものとは一体何か。引用箇所では「航空母艦」を建艦中の「大船台」を有する「川口造船所」に固有名詞が与えられている。換言すれば、河川以外で唯一固有名詞を与えられた存在として、「川口造船所」が『酸素』より突出して浮上してくる。

「川口造船所」で建艦されている「航空母艦」については、既に『酸素』序盤、第二章、「あれは川口造船所が東洋一と威張ってる船台だが、あそこで帝国海軍は鳳鶴とかいうでっかな航空母艦を作ってる」というコランの発言によつて、「鳳鶴」という固有名詞が与えられている。『酸素』は、俯瞰的に見渡した神戸の街から、神戸を端的に表象するものとして、「航空母艦」「鳳鶴」を建艦中の「川口造船所」を抽出していると言つていいだろう。

実は、『酸素』の小説内現在である一九四〇年当時、神戸の造船所では航空母艦を建艦中であつた。「川口造船所」のモデルとなつた川崎重工神戸造船所では、空母・瑞鶴を建艦中であつたのである。

大日本帝国海軍は戦艦、航空母艦、巡洋艦、駆逐艦など、数々の艦艇を保有していたが、その中でも、巨大にかつ建艦には高度な技術を要する戦艦と航空母艦の建艦過程には、ある特徴があつた。

戦艦の場合、三笠を始めとして日露戦争時の戦艦は、同盟国イギリスに建艦を発注したものであつた。しかし、戦艦・薩摩建艦以降（一九一〇年三月竣工）、帝国海軍は戦艦を日本国内で建艦するようになる。戦前、日本において戦艦を建艦した都市は、海軍工廠のあつた横須賀と呉、そして長崎と神戸の四都市であつた。長崎の三菱重工長崎造船所と神戸の川崎重工神戸造船所は、民間企業として戦艦建艦の一翼を担つたのである¹⁰⁾。

航空母艦の建艦状況も、戦艦のそれとほぼ等しい。帝国海軍、最初の航空母艦である赤城は呉海軍工廠で建艦されているが、赤城以降、日本国内で建艦された航空母艦は、横須賀、呉の海軍工廠か、三菱重工長崎造船所、川崎重

工業神戸造船所のいずれかで建艦されている⁽¹¹⁾。

ただ神戸は、横須賀や呉、長崎とは都市の規模が違う。他の三都市と比べ、神戸は圧倒的に大きく、大きいが故に都市のイメージも多様化し、例えば横須賀のように〈海軍都市〉としてのイメージに回収されていかない⁽¹²⁾。

しかし、戦艦・航空母艦の建艦を担った川崎重工神戸造船所を有する神戸は、〈海軍都市〉としての側面を持っている。そもそも神戸という近代都市の成り立ちを考えてみれば、平清盛の福原京以来、神戸を歴史の表舞台に引張り出したのは、一八六四年に設置された神戸海軍操練所であった。実は神戸という近代都市の成り立ちそのものに、海軍は深くかかわっていた。そして『酸素』は、「航空母艦」を建艦する「川口造船所」を、他の神戸を表象するものから突出させることで、舞台とした神戸の都市イメージを〈海軍都市〉として浮上させるよう図っている。

阪神の海に碇泊した聯合艦隊を見ると、地面に唾を吐いた。

『酸素』で神戸を〈海軍都市〉として浮上させるための仕掛けは、何も「航空母艦」「鳳鶴」を建艦する「川口造船所」だけではない。『酸素』において「聯合艦隊」は、わざわざ「阪神の海」に碇泊している。『酸素』は、帝国海軍の象徴とも言える「聯合艦隊」をわざわざ「阪神の海」に碇泊させることで、小説世界と帝国海軍とを結び付けようとしている。

しかし、神戸を〈海軍都市〉として浮上させる『酸素』は、その第十一章で、神戸を離れ、京都に舞台を移すこととなる。では、なぜ『酸素』は第十一章で〈海軍都市〉神戸を離れ、京都に舞台を移したのか。『酸素』で京都は具体的にどう描き出されているのか検証し、『酸素』が京都を舞台としたことの意義について解明していきたい。

東京の酸素特約店主岩本大蔵が、京都で客をするのは、祇園の勝きぬにきまっていた。女将のおさとは鯉節しか売らなかつた岩本商店の先代を知っていて、四十歳になる禿頭の大蔵を「若旦那」と呼んでいた。

知恩院の裏山から流れ出て、この遊興地を貫く小流を臨んだ奥座敷には、瀬川と雅子のほかに、もう一人客が

あった。陸軍中佐宮崎亀太郎は三十六歳の肥った小男で、眉間の縦皺が目立っていた。岩本が昭和十二年に蘇州の兵站部の主計少尉だった時、宮崎の阿片売買のため在庫の小麦を見返りに役立てたことがあった。利益は無論宮崎の属する特務機関の機密費を賄うためだったが、一部は無論岩本の手に入って内地に送られ、岩本商店の間屋経済を潤すのに役立った。

ここで、京都祇園のお茶屋「勝きぬ」に集う人々——「日仏酸素」取締役兼営業部長の瀬川敏樹を始めとする人々——は、「日仏酸素」乗っ取り計画の密議を開いている。しかし彼らは、なぜ神戸ではなく、わざわざ京都で、「日仏酸素」乗っ取り計画の密議を開いたのか。

瀬川たちによる「日仏酸素」乗っ取り計画は参謀本部が主導したものである。参謀本部は言うまでもなく帝国陸軍の機関だ——帝国海軍では軍令部がそれにあたる——。本稿は、『酸素』が神戸の都市イメージとして〈海軍都市〉を浮上させると述べてきたが、帝国陸軍の謀略のための密議が——帝国海軍の不利益にも繋がる密議が——、帝国海軍が絶対的勢力を誇る〈海軍都市〉で開催できるわけもない。瀬川たちが彼らの本拠地である神戸ではなく、わざわざ京都で密議を開くということは、神戸が帝国陸軍にとって密議を開くには不可能な〈海軍都市〉であるということを浮上させてくる。『酸素』は神戸を離れ、取えて一時、京都に舞台を移すことで、神戸の都市イメージを〈海軍都市〉として確実に浮上させるよう図っている。

本稿は、『酸素』が第十一章を例外として、神戸という都市にその舞台設定を限定し、その小説世界を展開させていると述べてきた。しかし、神戸に舞台設定を限定する『酸素』は、主要登場人物の設定で、誰一人神戸出身者を設定していない。ならば、主要登場人物が神戸出身者ではないという『酸素』の設定は、その小説世界にどのような影響を及ぼしているのだろうか、検証していきたい。

『酸素』の主人公・井上良吉は東京「麹町」に「屋敷」を持つ家庭に育った人間で、序盤においては「いつそのこ

と今夜このまま東京に行ってしまおうか」とさえ思う人間である。ヒロインの瀬川頼子は「寢室を、東京の実家から送らせた家具で飾」るような人間で、神戸に住んでいても、東京という都市のイメージを身に纏おうとしている。頼子の夫、瀬川は「東北の地主」の家に生まれているし、「ミモザの会」の首唱者・勝田延雄は「東京の小さな製薬工場主の次男」である——そもそも「ミモザの会」そのものが「生活の必要から関西に住んでいる人間が、月に一回東京弁で話し合う機会を持つ」というのが、会の趣旨であった——。

『酸素』の主要登場人物で、藤井雅子だけが『酸素』創作ノートで「京都の古い宿屋の娘」⁽³⁾と記され、一応「関西人」と設定されている。花崎は「関西人」という雅子の設定と、雅子が時折関西弁を喋ることに着目して、雅子を「東京弁」「東京の人」への嫌悪を持つ人間と指摘している⁽⁴⁾。確かに最終章における、雅子の「ほんと東京の人て嫌い」「神戸に住んでいる東京の人、特に好かんわ。もっともらしい東京弁で」という発言からは、雅子が「東京弁」「東京の人」への嫌悪を爆発⁽⁵⁾させていると指摘することが可能であろう。しかし本稿で注目したいことは、雅子の「東京弁」「東京人」への嫌悪」という設定よりも、むしろ雅子が「関西人」であっても京都の出身者であって、決して神戸の出身者ではないという設定である。そもそも「関西人」による「東京弁」「東京人」への嫌悪の発露であっても、京都人によるそれと神戸人によるそれとは、明らかに性質が異なるものである。京都人には、首都を東京に奪われたという、神戸人にはない意識が存在している。

ともかく京都人の雅子も含めて、神戸に生を受けていない『酸素』の主要登場人物は、神戸という都市への愛着を口にすることなどない。例えば瀬川は「神戸なんて、どうせ一時の住まいですからね」と、神戸を突き放すように語っている。『酸素』では、主要登場人物の誰もが神戸出身者ではなく、彼らが神戸という都市に対し愛着を示さないということから、近代神戸を彩ったプラス要素は——ハイカラな国際都市といった表象や、阪神間モダニズムといった近代神戸を彩った独特の風俗は——、決して『酸素』から浮上してこない。『酸素』において、神戸という都市を

表象する事象は〈海軍都市〉以外、浮上してくることなどないのである。

〈海軍都市〉以外の都市イメージを浮上させない『酸素』という小説の一端は、『酸素』のタイトルにも採られた、「日仏酸素」の「事務所」の描写からも窺える。「日仏酸素株式会社」は「旧居留地内」の「三階建」の建物を「占拠」していたとされ、現在の旧居留地38番館がそれにあたりとされる¹⁵⁾。旧居留地38番館はウィリアム・メルル・ヴォーリズが設計を手掛けた建物であり、現在もなお往年の姿をとどめ、神戸の建築史を物語る上で欠くことのできぬ建築と位置付けられている。

しかし『酸素』は、「日仏酸素株式会社」が「占拠」するその建物を、殊更に強調して語ることなどしない。「日仏酸素株式会社」の建物は、詳細な描写を施されるどころか、淡々と必要以上のことは描写されずに、旧居留地の一角に埋没させられている。『酸素』は「日仏酸素株式会社」の建物に詳細な描写を施さないことで、神戸という都市に花開いた建築文化の様相が小説世界の前面に押し出されることを回避している。

ここまで本節で確認してきたように、「川口造船所」「聯合艦隊」「第十一章における京都という舞台設定」など、『酸素』は、神戸の都市イメージをある方向に導くために様々な仕掛けを設けている。一方で『酸素』は、主要登場人物を神戸出身者ではないと設定し、また近代神戸に花開いた文化の一端を描写しないことで、導きたいイメージ以外の方向に神戸が誘導されないよう注意を払っている。これらの設けられた仕掛けや払われた注意の働きかけによって、『酸素』に描き出された神戸の都市イメージは、〈海軍都市〉神戸というイメージに導かれていくのである。

3

その小男は舷側にもたれ、陸を眺めていた。海はまだ暗かった。波を消された港の水が拡がっていた。ドッ

ク、突堤、倉庫、起重機、煙突など、港の水際を形づくる建造物が、さまざまの色と光度の灯火を、飾花のようにつけたまま、次第に輪郭を現わそうとしていた。遠く背景の六甲の山は、茜色に明けかける四月の空に影絵を描き、その襷の文様を次第に現わして行くつもりらしかった。

小男の妻と子は、いま、この陸のどこかで、眠っているはずであった。三年会っていないなかった。妻は彼が帰れない理由を知っているが、子供は理解しないであろう。彼等は不幸であろう。しかし天皇の名の下に、戦争に駆り立てられている、この陸の住人の大多数に比べて、特に不幸ということは出来ない、と小男は考えていた。そしていま彼がこの陸の沖まで来たのは、家へ帰るためではなかった。

ここにあげたのは『酸素』の冒頭部分である。一人の小男が「舷側にもたれ」、船上より明け方の神戸の街を見ている。この小男が「天皇の名の下に、戦争に駆り立てられている、この陸の住人の大多数」と感慨に浸るところから、小男は左翼思想の持ち主だと類推できるだろう。

実際、小男は左翼思想の持ち主であった。小男の名は立花弘という。「三年前の大阪本部検挙事件に洩れた」立花は、妻子を神戸に残して上海へと逃れた。そして立花は、三年ぶりに妻子のいる神戸に戻って来た。しかし立花は、神戸の街に上陸しようとはしない。海上から神戸の街を眺めているだけである。では、なぜ立花は神戸の街に上陸することを選択しないのか。

立花は神戸に上陸すれば「面倒である」ことを知っている。だから立花は神戸に上陸しない。立花は神戸が自分を排除する都市であることを知っている。(海軍都市)神戸を支配する帝国海軍は、帝国陸軍よりも国際的でありペナルであったと一般的には流布されているが——帝国海軍を帝国陸軍より国際的でありペナルであったと変わりはない。立花のような思想——「この陸の住人の大多数」は「天皇の名の下に」行われている戦争に「駆り立てられてい

る」とする思想——は、帝国海軍にとつても厄介で、排除すべき思想である。もしも立花のような思想の持ち主が神戸に上陸して、思想活動を行うとするならば、帝国海軍は自らとは相容れぬ思想の持ち主である立花を全力で排除する方向に動くであろう。

立花は自らの思想が〈海軍都市〉神戸とは相容れぬ思想であるということを知っている。だからこそ、彼は妻子を神戸に残して上海へと逃亡した。立花が神戸に上陸せずに、神戸「沖」で「岡部」という男が来るのを「待っていないければならない」ということは、神戸が左翼思想の持ち主である立花を排除し、決して受け入れようとはせぬ〈海軍都市〉であるということを示上させてくる。

ただ〈海軍都市〉神戸において、左翼勢力は壊滅したというわけではない。細々とした状態ではあるが、確かに左翼組織は存在している。しかし神戸の中心において、左翼組織のメンバーたちは大手を振って左翼思想を喧伝できるわけではない。帝国海軍が絶対的勢力を誇る〈海軍都市〉神戸において、左翼組織の人々は「地下」に潜らなければならない。

高松久作は「地下」に潜らねばならなかった左翼組織のメンバーの一人であり、神戸の左翼組織の中心メンバーでもある。高松について良吉は「なかなか性根の据わった人物で、(中略)地下の炬火送りの役目を果たしている」と評している。

ただ高松は、良吉の評価とは裏腹に、自らの「非力」を認識しているし、上海へと逃亡した立花が話題に上ったとき、以下のように感情を露わにしている。

「しかし立花は転向者を信用したらあかん、いうてました」と秀子が口を挿んだ。

「わかってる」と高松は焦立たしげに叫んだ。「立花さんは偉大な闘士さ。しかし、日本を離れちゃっちゃ、やはり離れた人の考えになるんだ。我々は現にこの大弾圧の中にいるんだから、どんな要素にも、積極的なものを見

出して、行かなきゃならないんだ」

(中略)

「同志立花の発言は、このさい、否定だけだ、何等積極的なものを含んでいない。従って取り上げるに値しないと思う。(後略)」

高松は立花のことを「離れた人」、「取り上げるに値しない」人間と断じようとしているが、彼は立花の妻であった秀子に立花の名前を出されただけで、「焦立たしげに叫ん」でしまう。立花の名前を耳にして「焦立たしげに叫ぶ高松の様子からは、「大弾圧の中」にあつて「積極的なもの」を見出せずにもがいている、神戸の左翼組織の現状を垣間見ることができらるだろう。

ただ、「積極的なもの」を見出せない中にあつても、〈海軍都市〉神戸の左翼組織は時折会合を開いている。本稿で問題としたいのは、左翼組織の会合の内容よりも、左翼組織が会合を開く、その場所である。左翼組織が会合を開く場所は、以下のような場所であるとされている。

次の会合は電休の日曜日、須磨の裏山で持たれた。

引用個所で記された「須磨の裏山」以外で、左翼組織が会合を開く場所として「甲山」があげられている。東京「麹町」育ちである良吉は——高級住宅街であつた「麹町」出身ということと良吉が良家の出であるということが解る——、自身が参加した左翼組織の会合が開かれた場所について「神戸裏山」と表現している。

ここで、左翼組織が会合を開く場所が「神戸裏山」であり、「須磨の裏山」であり、「甲山」であることに注目してもらいたい。『酸素』では、神戸の中心で左翼組織が会合を開くことなど許されていない。神戸の中心で左翼組織が会合を開こうものなら、〈海軍都市〉神戸を支配する組織——帝国海軍——は、全力で牙をむいてくることだろう。

左翼組織は神戸の周辺に逃れて会合を開かざるを得ないし、言い換えるなら、『酸素』から浮上してくる〈海軍都市〉

神戸は、左翼組織の会合開催を、中心からその周辺へと追いやるよう仕向けている。

ここまで〈海軍都市〉神戸は、その都市理念とは明らかに相反する左翼思想を排除するか、もしくはそれを周辺へと追いやって、決して中心部に侵入してくることを許さない都市として描かれていると述べてきた。しかし〈海軍都市〉神戸において周辺へと追いやられていく思想は、何も〈海軍都市〉神戸の都市理念とは明らかに相反する左翼思想だけではない。左翼思想からは遠く離れた、“穏健な自由主義”とでも表すべき思想も、それが反軍的思想を孕んでいるからか、〈海軍都市〉神戸では周辺へと追いやられていく。以下、“穏健な自由主義”が神戸では周辺へと追いやられていく、その様を見ていこう。

前節でも触れた「ミモザの会」は「N大学」出身者で、現在は関西に住んでいる「東京人」の集まりであり、勝田がその首唱者である。この「ミモザの会」には「N大学」出身の良吉や瀬川の他、ある人物が参加している。それが元外交官の阿蘇竜介だ。

阿蘇は「五十六歳の元駐白大使」である。阿蘇は「帯剣の柄を握って外交を論じる軍人達のどら声を聞くのに疲れ、また結局のところ軍人的下剋上の風潮に感染している事務官達に愛想をつかして」、「二年前外務省の閑職を辞し、東京の家を売り払って、住友財閥の支流である豊中の妻の実家の一棟」に移り住んで、今は「静かに形勢を観望」しながら暮らしている。阿蘇は共産国家・ソ連をナチス・ドイツと同様「全体主義国家」として捉えており、決して左翼思想の持ち主ではない。阿蘇を左右いずれの全体主義も嫌う“穏健な自由主義者”として位置付けることは可能であろう。

また「軍人達のどら声」を嫌い、「軍人的下剋上の風潮に感染している事務官達に愛想をつかし」た阿蘇は、反軍的思想の持ち主とも言える。そして帝国海軍は軍隊であるから、阿蘇の反軍的思想は帝国海軍にとっても厄介な思想である。

反軍的思想の持ち主である阿蘇は、「ミモザの会」で『酸素』の小説内現在の《政治》に対し、以下のような見解を披歴している。

「私はお国のその方針（引用者注：いわゆる「南進論」のこと）が間違いだと思うんです」と阿蘇はいった。「お国は鉄から石油まで、六割は米国と英国の植民地に依存している。依存しながらその物資で軍備を拡大し、軍備の威力にものをいわせて、さらに物資を獲得しようとしている。こんな無理な話はない。今に米国と英国もいやだというにきまつてる。衝突すれば輸入は途絶える。そうなったらどうするんですか」

「どうですかね。民主主義国家は主義の国です。日本がドイツとの三国同盟を閣議に上せてる以上、勘弁してくれませんかよ」

「その政府が心配なんですよ。私は英米の実力を知ってます」

ここで披歴された、阿蘇の《政治》への見解は、現実認識に則っているという点においても、*「穏健な自由主義」*に基づくそれとすることができらるだろう。ただ本稿で問題としたいのは、阿蘇の見解の内容よりも、*「穏健な自由主義者」*阿蘇が見解を披歴した、その場所である。

「ミモザの会」が開催されるのは「夙川」である。「夙川」は現在の行政区分では兵庫県西宮市に位置し、神戸の東、阪神間のほぼ中間にあたる。決して神戸の中心にある場所ではない。先に左翼組織の会合が「甲山」で開催されたと述べたが、「夙川」は「甲山」を間近にのぞむことが出来る場所でもある。「甲山」を神戸の周辺として位置付けることが可能であるならば、「夙川」も神戸の周辺として位置付けることが可能であろう。

*「穏健な自由主義者」*阿蘇は、神戸の周辺「夙川」で、自らの思想に基づき《政治》を批評する。換言すれば、『酸

素』がその舞台として設定した神戸は、その中心で「軍人達のどら声」を嫌い、「軍人的下剋上の風潮に感染している事務官達に愛想をつかし」た阿蘇が《政治》を批評することなど許さない〈海軍都市〉として浮上してくる。

阿蘇は『酸素』最終章においても、有田外相の『国際情勢と帝国の立場』という特別放送を「穏健な自由主義」の立場から批判している。

彼は外交は戦争を避ける技術という古い信念を持っていた。もとの同僚の有田が、「国運を賭すのも辞さない」と、たとえどんな陸軍の干渉があつたにしろ、いつてしまったことを、許せなかった。

チェンバレンはヒットラーの気違い戦争をとめることは出来なかったが、イギリス国民はチャーチルに国の主権を与えるべきではなかったというのが、彼の意見である。あの回想録屋はまた一つ悲壮なる回想録を書いために、軍需資材の大蓄積と大消耗を計画するにきまつている。その結果、戦争は長びき、それだけアメリカの鉄鋼屋が肥えるということだ。ヒットラーが和睦したがっているのなら、何故和睦しないんだ。そうすれば、ヒットラーはソ連の方へ向いて、全体主義国家同士、狂犬のように噛み合うことになる。そこで少なくとも、イギリスの民主主義は守れるのだ。フランスは見殺しにすればいい。あれはどうせ亡びた国なんだ。

引用箇所で阿蘇は「穏健な自由主義」に基づく「形勢の観望」を「六甲山上」で行っている。言い換えるなら、阿蘇は「戦争」に対する「外交」の優越を説いた《政治》論を、神戸の周辺、「六甲山上」で展開するのである。

「豊中の妻の実家の一棟」に住む阿蘇は、「夙川」や「六甲山上」へは赴くが、決して神戸の中心に足を踏み入れようとはしない。ただ、阿蘇が神戸の中心に足を踏み入れないというこの裏を返せば、神戸が阿蘇に、神戸の中心に近付かないよう要請していると言っているのではないか。つまり〈海軍都市〉神戸で絶対的勢力を誇る帝国海軍は、阿蘇が「軍人達のどら声」を嫌う反軍的思想の持ち主だからこそ、彼が神戸の中心へ侵入して来ることなど許さない。帝国海軍は、阿蘇が「戦争」を「避け」、「外交」に重きを置くような反戦、反軍的思想の持ち主だからこそ、阿

蘇を神戸の中心からその周辺へと追いやるよう仕向けていく。

ここまで述べてきたように、〈海軍都市〉神戸は、左翼思想であろうと、*「穏健な自由主義」*であろうと、その思想の過激度にかかわりなく、神戸の中心で、戦争を批判する言動が公然と披歴されることを許さない。そして〈海軍都市〉神戸の支配者である帝国海軍は、戦争批判者や反軍的思想の持ち主に対し、神戸の中心へ侵入して来ることなど許さずに、彼らを排除する方向に動くか、彼らを神戸の中心からその周辺へと追いやるよう機能していくのである。

4

『酸素』最終章においてその存在が急速にクローズアップされる人物がいる。それは海軍主計中尉の西海だ。西海は、『酸素』序盤において「やわらかい東京弁」を喋り、「笑顔」を見せ、あるいは「新卒業生風の控え目な態度」をして登場している——良吉や瀬川と同様、「N大学」出身である西海には、いかにも大学を出たばかりの初々しいイメージが与えられている——。しかし最終章で、西海は自らの思想を間接的に披歴しつつ、その本性を露わにしているのである。

「必ずしも陸軍とは限らないかも知れません」と西海がいった。「海軍の若手の間に、蘭印占領を主張するものがあるそうです。蘭印さえ取ってしまえば、輸出制限についてアメリカと面倒な交渉をする必要はないそうです」西海の「南進論」の披歴は、阿蘇をして「予想だにしなかった」と思わしめる出来事であった。西海はこの発言以降、阿蘇によって「海軍の右翼」と規定されていく。西海の『酸素』最終章おける思想の披歴——『酸素』最終章において西海が本性を露わにし出したということ——は、『酸素』「第二部」で、西海が*「暗躍」*するであろうことを予感させるし、また西海のような「海軍の右翼」が『酸素』の前面に押し出てきたということは、〈海軍都市〉神戸を

支配する帝国海軍のパワーバランスに変化が生じていることを示していると言っている。いいだろう。

では、〈海軍都市〉神戸を支配する帝国海軍のパワーバランスには一体どのような変化が生じたのであろうか、その詳細を検証していきたい。

『酸素』の小説内現在では、一九四〇年四月から六月にかけてであるが、当時内閣の首班は、海軍出身の米内光政であった⁶⁶。米内内閣の懸案事項は日独伊三国同盟締結の是非であり、米内首相は日独伊三国同盟に対し、反対の姿勢を崩さなかった。ただ日独伊三国同盟については、米内の出身組織である帝国海軍にも推進派は存在していた。三国同盟推進派は三国同盟反対の姿勢を崩さない米内を突き上げ、結局、三国同盟推進派の突き上げに抗しきれずに、米内は首相を辞し、米内内閣は瓦解する。続く近衛文麿内閣で日独伊三国同盟は締結されることとなるが——日独伊三国同盟が締結されるのは一九四〇年九月二十七日——、『酸素』は、このような一九四〇年当時の《政治》を踏まえている。

『酸素』で、西海が小説世界の前面に押し出してくるということは、帝国海軍の内部で、主流派であった米内的海軍——日独伊三国同盟締結を阻止し、日米開戦も回避しようとする一派。〝条約派〟と呼ばれていた——が主流派から引き、代わって西海的海軍——日独伊三国同盟を推進し、日米開戦も辞さないという一派。〝条約派〟に対して、艦隊派”と呼ばれていた——が覇権を握ったということを示している。西海的海軍が帝国海軍内部で覇権を握った結果、帝国海軍も日米開戦を辞さずという方向に舵を切り、それが一九四一年十二月の日米開戦へと繋がっていく。

ところで吉田裕は、戦後の日本人の戦争観には、陸軍・悪玉／海軍・善玉という二項対立図式で捉える。海軍史観“が存在していると指摘する⁶⁷。吉田によれば、海軍を善玉とする“海軍史観”は、一九六〇年代にその前史を求めることができ、七〇年代に本格的に確立したとされる。“海軍史観”の確立に寄与した具体的作品名をあげて、海軍史観“を捉えるならば、阿川弘之『山本五十六』（一九六五年十一月、新潮社）や小泉信三『海軍主計大尉小泉信

吉』(一九六六年八月、文藝春秋)などがベストセラーに名を連ねた六〇年代半ばに、『海軍史観』は生まれたとされ、七〇年代、八〇年代、米内光政や井上成美を主人公とした書物が出版されることで、それは確立したとされる。

吉田は、『海軍史観』について、以下のようにまとめている。

一つは、海軍が、最終的には陸軍に押し切られたとはいえ、超国家主義的で侵略主義的な陸軍に対する抑止力、あるいは抵抗勢力として一貫して機能したという主張である。ここでは、海軍の戦争責任が完全に否定されているのが特徴的である。

もう一つは、海軍軍人と海軍という組織の自由主義的で合理主義的な体質の強調である。ここでも、粗暴で精神主義的な陸軍の対極にある存在として海軍が位置づけられているのが目をひく¹⁰⁹。

もっとも、帝国海軍を「粗暴で精神主義的な陸軍の対極にある存在」とする『海軍史観』には、現在、否定する材料が出されている。帝国海軍の『条約派』を代表する人物であるとされる井上成美は、国際法を無視した重慶爆撃の推進者でもあった¹¹⁰。何も帝国陸軍だけが「超国家主義的で侵略主義的」「粗暴で精神主義的」な性格を持っていたわけではない。

ただ我々が現在、『海軍史観』を完全に払しょくできたかと言えは、決してそうとは言えない状況であろう。帝国海軍を語るとき、我々は未だに米内ら『条約派』を中心に語っている。しかし帝国海軍は、『条約派』で固められていたわけではないし、その『条約派』も侵略主義と決して無縁であったというわけではない。帝国海軍の内実は、『条約派』と『艦隊派』が派閥抗争を繰り返している状態にあった。そして米内内閣瓦解後、『艦隊派』が帝国海軍の主導権を握って、大日本帝国は太平洋戦争開戦へと突き進んでいく。

さて『酸素』が『文学界』に連載されたのは、一九五二―五三年である。『酸素』は吉田の定義する『海軍史観』がこの国を席卷する以前に発表された作品であった。よって『酸素』は、単純に帝国海軍を帝国陸軍の抵抗勢力とし

ては捉えていない。帝国海軍には、確かに米内のような日独伊三国同盟や日米開戦を阻止せんとする“条約派”が存在していた。しかし『酸素』は、最終章で西海をクローズアップさせることによって、帝国海軍が米内的海軍から「右翼」的で「過激」な思想傾向を持つ西海的海軍に乗っ取られていく、その様を浮き彫りにしている。

“海軍史観”は帝国海軍を帝国陸軍の抵抗勢力として仕立てあげること、帝国海軍の戦争責任を免責しようとした。しかし『酸素』は“海軍史観”を採らない。帝国海軍と帝国陸軍の対立関係を「日仏酸素」乗っ取り計画を通して描き出そうとはしているものの、帝国海軍内部の「右翼」「過激分子」も描き出して、単純に帝国海軍を善玉として描き出すことだけは回避している。『酸素』は〈海軍都市〉神戸と帝国海軍が、やがて西海的海軍——“艦隊派”——に支配されることを読者に予感させて、その幕を下ろすのである。

ここまで述べてきたように、『酸素』が浮上させる神戸の都市イメージは〈海軍都市〉であった。ただ『酸素』は、いわゆる“海軍史観”をもって、表層的に〈海軍都市〉神戸と、それを支配した帝国海軍とを物語るのではない。〈海軍都市〉神戸を支配した帝国海軍の内実も含めて——“条約派”と“艦隊派”が派閥抗争を繰り広げているという帝国海軍内部の《政治》状況も含めて——、重層的に〈海軍都市〉神戸を描き出そうとする。

『酸素』を、神戸を舞台とした近代日本文学の小説として位置付けるならば、『酸素』は近代神戸の極めて重要な一面——〈海軍都市〉として神戸——を我々に示してくれる小説として位置付けることが可能であろう。ただ『酸素』は、〈海軍都市〉神戸を表層的に描き出すのではない。〈海軍都市〉神戸を支配した帝国海軍の内実をも『酸素』は示してくれ、『酸素』から〈海軍都市〉神戸と帝国海軍の内実を読み取るとき、我々はいわゆる“海軍史観”の呪縛からも解放されるのである。

- 注
- (1) 奥野健男「『酸素』について」(『三田文学』一九五五年十月)
- (2) 「文学界」連載終了時、花田清輝は「非常に床屋政談的」(花田、中村光夫、武田泰淳「創作合評」「群像」一九五三年八月)と述べ、『酸素』を酷評している。
- (3) 『酸素』は『新潮日本文学』43 大岡昇平集(一九七一年四月、新潮社)、『大岡昇平全集 第三卷』(一九七四年一月、中央公論社)、新潮文庫『酸素』(一九七九年一月、新潮社)、『大岡昇平集4』(一九八三年五月、岩波書店)、『大岡昇平全集4』(一九九五年十月、筑摩書房)と収録されたが、「第一部終」と記されたのは、新潮社単行本(一九五五年七月)だけである。
- (4) 大岡が『酸素』「第二部」の構想を語った機会としては、吉本隆明との対談「詩は行動する」(『文藝』一九七四年一月)や「わが文学生活——大岡昇平インタビュー」(『海』一九七四年十二月)、中野孝次との対談「小説作法」(『文学界』一九八三年四月)などがあげられる。また大岡は、「第二部」も含む『酸素』全体の構想を記した『酸素』構想ノート(『海』一九七四年十二月)を発表している。
- (5) 花崎育代「諸〈崩壊〉と二つの戦争下——『酸素』」(『目白近代文学』第5号、一九八四年十月)、『大岡昇平研究』所収、二〇〇三年十月、双文社出版)
- (6) 大岡昇平「わが文学に於ける意識と無意識」(『われらの文学』4 大岡昇平)所収、一九六六年十二月、講談社)
- (7) 大岡昇平「成城だよりⅡ」(『文学界』一九八二年十二月)
- (8) 清水徹「《政治》と《情事》」(『大岡昇平集4』)所収、一九八三年五月、岩波書店)
- (9) 花崎育代は注(5)の論考で、清水論を発展させる形で自らの『酸素』論を展開させ、『酸素』を以下のような小説と結論付けている。
- (10) 「霧」の中に、日中戦争下の諸崩壊を暗に示しながら、同時に、作品執筆発表時の朝鮮戦争下の(そしてさらには今日に至る「戦後」の)日本人たちが、どの方向に進むのか、という「諷刺」を籠めつつ、「酸素」は幕を閉じるのである。
- (11) 呉市海事歴史博物館編、監修者・戸高一成『呉市海事歴史科学館図録 福井静夫コレクション 傑作選 日本海軍艦艇写真集 戦艦巡洋戦艦』(要目・艦艇一覧)(二〇〇五年四月、ダイヤモンド社)
- 呉市海事歴史博物館編、監修者・戸高一成『呉市海事歴史科学館図録 福井静夫コレクション 傑作選 日本海軍艦艇写真集 呉市海事歴史博物館編、監修者・戸高一成』(二〇〇五年四月、ダイヤモンド社)
- 〈海軍都市〉神戸と大日本帝国海軍の内実

〈海軍都市〉神戸と大日本帝国海軍の内実

三八

航空母艦・水上機母艦「要目・艦艇一覽」（二〇〇五年六月、ダイヤモンド社）

(12) 横須賀は戦後も米海軍の基地がおかれ、軍港としての機能を有し続けた。映画『豚と軍艦』（監督・今村昌平、脚本・山内久、一九六一年一月、日活）は、横須賀が戦後も〈海軍都市〉であったということを示す作品としてあげられるだろう。

(13) 大岡昇平「『酸素』構想ノート」（前掲）

(14) 花崎育代「『関西弁』からみる大岡昇平の文学」（日本近代文学会関西支部編『近代文学のなかの“関西弁”——語る関西／語られる関西——』所収、二〇〇八年十一月、和泉書院）

(15) 「日仏酸素」のモデルで、実際に大岡昇平が勤務していた帝国酸素株式会社神戸本社は、帝国酸素の社史『帝国酸素の歩み』（原点から未来をみつめて）（帝国酸素株式会社編、一九八一年三月、ダイヤモンド社）によると、大岡が勤務し、『酸素』の小説内現在である一九四〇年当時、神戸市神戸区明石町38番地（現在の中央区明石町、旧居留地38番館）が建っている場所）にあったとされる。

(16) 『酸素』は『大岡昇平集4』に収録される際、大岡が最後の加筆・訂正を行っているが、「第九章」には「この国の首相近衛文麿」という誤記が見られる（傍線部が誤記）。『酸素』の最新収録単行本である『大岡昇平全集4』は『大岡昇平集4』を底本としているため、この誤記が踏襲されている。『酸素』の小説内現在である一九四〇年四〜六月当時、米内光政が首相であった（米内内閣は一九四〇年七月二十二日まで続いた）近衛文麿は枢密院議長であった。

(17) 吉田裕は『日本人の戦争観』（一九九五年七月、岩波書店）の「第6章 経済大国化の中の変容」「第7章 ダブルスタンダードの動揺」で、「海軍史観」の派生とその普及について論じている。

(18) 吉田裕『日本人の戦争観』第6章 経済大国化の中の変容（前掲）

(19) 前田哲男『新訂版 戦略爆撃の思想——ゲルニカ、重慶、広島』第3章 百一号作戦——「戦攻略爆撃」の実行（二〇〇六年八月、凱風社）

*大岡昇平の文言の引用は『大岡昇平全集』全23巻別巻1（一九九四年十月〜二〇〇三年八月、筑摩書房）に拠った。なおルビは省略した。